

## 『世代を超える論語の魅力―素読を通して論語を楽しむ―』

2012年1月23日(月)  
安岡活学塾 安岡 定子 氏

昼のひとつときに論語の名文に触れていただきたいと思います。私はいろんな年齢の子供達と一緒に論語を読んでいる。幼稚園・保育園、小学校、中学校、高校と授業を持っており、それ以外にもいろんな論語塾で講師をさせていただいている。

### 1 祖父(安岡正篤氏)のエピソード

初めに祖父とのエピソードについて触れたいと思う。論語の講師をしているが、祖父と一緒に素読を一回もやったことはないし、祖父から論語に限らず古典全般について薫陶を受けたこともない。しかし、祖父と同じ空間と一緒にいることができたのが私にとっての一番の財産である。

子供達と論語を読む上で一番役に立っている祖父の言葉は、「子供は幼いから、中身も幼稚であると思っているのは大人の傲慢である。子供ほど中身が充実していて純粋なのだから、子供に接する大人ほど上質でなければならない」ということである。実際に子供達と接するようになって、この言葉は自分の「戒め」の言葉となっている。論語を子供に分かりやすく話をするというのは難しいが、中身の濃いもの、充実したものほど、分かりやすく伝えていくように心掛けている。「分かりやすく」ということは、「簡単にする」とか、「省略する」ということではなく、「中身の質を落とさないで分かりやすく伝える」ということで、大変難しい課題であり、日々格闘している。「子供だからこの程度で良い」とか、「こういう言い方で良い」と自分で思わないようにしているのは、まさに祖父の言葉を心に留めているからである。

祖父は、私にはそのような素振りは見せなかったが、大学時代の教授から卒業時に聞いた話では、大学で漢文を専攻する学部に進んだことをたいへん喜んでくれたらしい。しかし、祖父は私には何も教えてくれず、聞けば答えるという態度であった。大学での宿題がわからないときに質問しても、直接答えてはくれなかった。そのような場合に、祖父は暗い書庫に行って、本を数冊探し出してきて、関連するいくつかの箇所を示してはくれたが、それが答えなのではなく、それを見て自分で解答を作成しなければならなかった。「勉強というのは、問いに対してどうしたらそれを調べることができるかという方法を知ることであり、答えを暗記するのではなく、問題を提起されたら解決策を考えることが本当の学習である」という言葉を何度も何度も繰り返し言われた。だからこそ、これを読んで考えろというのが祖父の教育の方針であった。懲りない私は何度もチャレンジして質問したが、書庫に行って同じ指導を繰り返しされた。もし、祖父が直接解答を教えてくれたら、次の日の授業はクリアーできて、自分のものにはならなかっただろう。苦勞して得たものは、一生ものでしっかりと身につく。子供達を指導する上で、調べる術を身につけることの大切さを教えることと、子供達が調べている間はちゃんと回答するまで待つてあげるということを心掛けている。この二つが子供達と接するときに大変役に立っている祖父とのエピソードである。

### 2 孔子の人生

孔子は、2500年前の魯の国に生まれた思想家であるが、私は教育者としての一面が好きで、現代にもこのような先生がいてくれたらと思うような人物である。2500年前の春秋時代は戦乱の世の混乱期であった。孔子は、母親や父親にも早く先立たれ、肉親の縁も薄い不遇な少年であった。論語の中に「吾れ十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳順う。七十にして心の欲する所に従えども矩を踰えず」という章句があるが、「吾れ十有五にして学に志す」というのは、まさに孔子が一人きりになったときに学問をやっ払いこうと志を立てたものである。この章句は孔子の伝記に近いものと言われている。最後の「七十にして心の欲する所に従えども矩を踰えず」というのは、自分の思い通り生きても、社会規範からはみ出さないということであり、理想の人間像を示している。孔子がそこまで本当にできていたのかどうかはわからないが、「こうありたい」と目指していた孔子の理想像がそこに現れている。

孔子は苦勞人で身分の低い役人からスタートし、公の仕事をしつつ学問で生きていく。ここでいう「学問」とは「過去を学ぶこと」、「古典を学ぶこと」であり、孔子はさまざまな諸問題を解決する糸口は、過去や歴史にあると考え、あらゆる分野の古典を徹底的に勉強した。「四十にして惑わず」というのは、何も迷いがなかったということではなく、道義や道理、すなわち、人間はどうあるべきかがわかったということである。しかし、道義や道理のとおり生きていけるかといえば、そのようなことはなく、どうしたらいいのだろうという日々の悩みは当然あるわけで、何も迷いのない哲人のような人間ではなかった。いかに生きていくべきかという道理そのものがわかったので、ぐらつかなくなった。それが「不惑」ということである。

「五十にして天命を知る」という50歳からの2、3年が孔子の絶頂期で、大臣となって活躍した時期である。「天命」というのは人間がこの世の中でやるべきことであり、すべての人間は使命を持って生まれてきているというのが孔子の考え方である。自分の使命についてようやく気がつき、「自分の人生はこれをするためにあったのだ」とやっとわかったのが50歳であったということで、それが「五十にして天命を知る」ということの意味である。

孔子は50歳にして大臣として華開いたが、この時代は戦乱の世であり、下剋上や賄賂がはびこっていた過酷な時代であった。したがって、孔子のような人物は疎ましがられて失脚させられ、50代半ばで公職から去らざるを得ず、以後弟子を連れて、自分の思想・哲学を説く放浪の旅へと出る。この困難な旅を14、5年続けて、魯の国に帰り、3年かけて弟子とともに書物の編纂をして亡くなっている。

孔子の生まれた時代の数百年前は良き時代が続き、いわゆる「君子」と呼ばれる理想のトップがいて、長い間安定した時期があった。そこでは、文化の華が開き、人間として情緒的にも充実した国が作られていた。そのような時代があったのに、「なぜ自分の生きている時代はこうなってしまったのか」と孔子は嘆いていた。だからこそ、孔子は、過去のリーダー達がどのように振る舞い、どのように考えていたのかということを徹底的に学び、それを弟子達に話した。

「君子は義に喩り、小人は利に喩る。」という章句があるが、その「君子」というのが理想の人物ということになる。過去の「君子」と呼べるようなリーダーが、どういう考えを持ってどういう行動をしていたかということについて古典を取り上げて弟子達に話をした。「戦乱の世で平和な良い国家をつくるにはどのようにすればよいのか」という問いかけに対し、普通の人間は、軍備の増強、経済の充実、刑罰の強化等について考えるが、孔子は違う考えを持っていた。孔子は「仁のある人を育てる」という人材教育を考えていた。「仁」は「思いやりの気持ち」と置き換えることができるが、「おもんばかり優しい気持ち」

のことである。「仁」を持った人を育てることが良き国をつくるための最善の方法であると孔子は断言している。戦争しているときに人を育てては時間がかかって間に合わないという人がいるかもしれないが、志があり、思いやりのある人物を育てれば、それは一生ものであり、その人がまた次の人を育てていけば、どんどん末広がりになっていく。戦乱の世だからといって「仁」のある人を育てるのをあきらめたら、ゼロはゼロでしかない。戦乱の世であっても一つ種を蒔けば、そこから芽は出てくるという考え方を孔子は持っていた。確かに武力の増強も重要であるが、それは永遠の解決にはならない。

子貢という頭脳明晰で雄弁な弟子が「政（まつりごと）とはどういうことか」と孔子に質問したところ、孔子は、「食を足し、兵を足し、民をして之を信ぜしむ」と述べた。「食」は経済、「兵」は軍備、そして「信」を持った民を育てることの3つが揃って国が為ると孔子は言っている。子貢は、「その3つのうち、一つ捨てるならばどれを捨てるのか」と尋ねたところ、孔子は「軍備を去る」と答え、子貢が「さらにもう一つ捨てるならば」と究極の選択を迫ったところ、孔子は「食を去る」と答えた。子貢が驚いて「それでは国民が飢えてしまう」と言ったところ、「人間には寿命があり、限りある命はいずれ終わるわけで、信のある民が残れば、国が滅びても、そこからまた立ち直っていく。だから、「人」を育てていくのが重要なのだ」と説いている。

孔子の弟子には多くの仕官の口があり、公職へと巣立っていった。孔子の教えはすべて実践哲学であり、学んだことを現場で活かすことができなければ意味がないという考えであった。したがって、弟子は、現場で必死に働いたので、高い評価を得て、それが孔子の名声にもつながった。その意味においては現場の弟子達が孔子の評判を高めたと言うこともできる。

孔子は弟子とともに広い中国を歩いて教えを説いてまわったが、孔子の教えを素直に聞く相手ばかりではなく、時にはこのような乱世において孔子の話の聞いても意味はないと追い返される場面もあった。また、孔子をアドバイザーとして呼ばれては困る国からは刺客を差し向けられたりすることもあった。まさに孔子の旅は苦難の旅であったが、人に自分の考えを説いていくということを一生涯の仕事と決めて旅を続けた人である。孔子のようなインテリは隠者になるケースが多かったが、孔子はそうせず、自分が現場に出て教えを説き続ける、すなわち実践することこそがすべてであるとした。そして、その実践する方向を間違えないために古典をきちんと学んで自分の思想を確立するということを考えていた人である。どんなに不遇であっても自分はやり続けるという根気強さと精神力を持っていたところに孔子の凄さがある。

### 3 『論語』の編纂と構成

『論語』は、孔子の言葉が集まって1冊になったものであるというのは皆さんご存じのとおりであるが、孔子の没後100年から200年経って今の形の『論語』になったと言われている。それは、孔子が後世の人に語りたいたいと思って残したのではなく、孔子の言葉を聞いた弟子達が、散逸してはもったいないと考えて集めたものなので、編纂に関して孔子は一切関与していない。『論語』は、20篇約500章から成り立っているが、編纂に携わったグループのカラーが鮮明に出ている所、例えば、「学而」、「為政」のようにグループ分けがきちんとできている篇もあれば、孔子の言葉が羅列されているだけの篇もある。これは編纂に関わった弟子の数がとても多いということと、何年にもわたって編纂されていることに起因するものであり、最初の方と最後の方では色合いが違っていたりする。

20篇あるうちの概ね前半10篇に皆さんがご存知の名文・名句がより多く収められている。後半の方

は一つの章句の文章が長くなっているの読み難いかもしれない。先ほど紹介した「政（まつりごと）」とはどういうことか」と尋ねた弟子との会話も後半に収められているが、それらは長くても、みずみずしくリズムカルに描かれているので面白いものとなっている。長い章句は敬遠されがちであるが、会話であれば、面白いものが多い。

#### 4 『論語』の素読と解釈

孔子が残した言葉を皆さんと一緒に読んでいきたいと思う。章句の書いてあるプリントを用意してきたが、子供達と『論語』を読むときに使っている『親子で楽しむこども論語塾』という本から抜粋してきたものである。最後まで読んで、その後に解説をする。

##### 《素 読》

（「曰く」はイワクではなくノタマワクと読まれました。為念）

- ◎ 子曰わく、学んで時に之を習う、亦説ばしからずや。  
    朋有り、遠方より来る。亦楽しからずや。  
    人知らずして慍らず、亦君子ならずや。
- ◎ 子曰わく、巧言令色、鮮し仁。
- ◎ 子曰わく、辞は達するのみ。
- ◎ 子曰わく、歳寒くして、然る後に松柏の彫むに後るるを知る。
- ◎ 子曰わく、性、相近し。習い、相遠し。
- ◎ 子曰わく、君子は義に喩り、小人は利に喩る。
- ◎ 子曰わく、仁遠からんや。我仁を欲すれば、斯に仁至る。
- ◎ 子曰わく、徳は孤ならず、必ず隣有り。

今の読み方が素読と言って、寺子屋や藩校で行われていた読み方である。幼稚園や保育園で素読をするとき、子供達は字が読めないの、私が言ったことを聞いたら、それをそのまま繰り返して言うという形式でやっている。素読をするときの子供達の集中力は本当にすごい。私が動けば、自然に音源である私の方に体が向いている。子供達との勉強では日々新たな発見があつて楽しい。

江戸時代が最も盛んに『論語』が読まれた時代であると思う。『論語』は、寺子屋でも教えられていた。寺子屋は今の郵便局の数より多かったと言われている。また、各藩の藩校では藩を背負って立つエリートにも教えられていた。藩校でエリート達に読まれていたものも、寺子屋で庶民に読まれていたものも『論語』であったということは、日本人がいかに幅広く素養として『論語』に触れていたかがわかる。

子供達は意味ではなく、音で覚えていく。今読んでいただいたとおりの漢文独特のリズムは心地よいものであり、今人気の『平家物語』も『徒然草』もそうであるが、名文でなければ声に出して読むのには耐えることはできないと言われている。日本の古典も声に出して読まれるのでいかに優れた文章かということがわかる。名文・名句を声に出して体の中に入れていくということが重要であり、何年か経って「これはこのような意味だったのか」とわかるときがくる。そのときには十分に消化して血となり肉となっている。幼いうちに音で覚えていけば、中学・高校の教科書で『論語』に再会したときに、返り点や文法に翻

弄されることなく記憶がよみがえり、中身を楽しめるようになる。日本の昔の教育は良かったとつくづく感じる。

何年も読んでいると子供でも自然と意味がわかるようになってくる。すばらしい言葉を自然に体に入れているので、文章力や表現力が身につくことは言うまでもないが、それに加えて思考力が確実に身についてくる。私のクラスに来ている子供達を見ていると表現力や感性が確実に磨かれているので、幼いうちから名文に触れることはとても大切だと実感している。表現力や思考力に加えて、自分の柱となる拠り所を見つけられるということもすばらしいところである。

せつかく章句を読んだので簡単に解説していこうと思う。

「学んで時に之を習う」は、『論語』の冒頭の章句で、『論語』はここから始まる。これは「小論語」と呼ばれるくらい『論語』のエキスが詰まっている。「これぞ論語」と言われるくらい一番大事な章句である。「学んで時に之を習う」の「之」に自分の頑張っていることを当てはめる。勉強でも稽古事でも毎日毎日練習していれば上達していく。昨日できなかったが、今日はできたということを実感できれば喜ばしいものである。そのことを言っているのがこの句である。次の「朋有り、遠方より来る。亦楽しからずや」については、一生懸命頑張っていてもうまくいかず、心が折れてしまうこともある。そんなときに同じ気持ちで頑張っている友達がいてくれて、お互いの状況を共有できたらなんて楽しいことだろうかということを行っている。ここでいう友とは一生つきあっていけるような良き友人のことで、数が少なくても一生つきあえる友人ができれば楽しいということを表している。最後の「人知らずして慍らず、亦君子ならずや」が最も大切な句である。人間は認められたいという欲求を持っている。しかし、認められなくても、自分がどうなりたいかという目標を定めて、それに向かって努力する人、すなわち、人のためではなく、自分のために努力し続ける人こそ「君子」だということを最後の文は説いている。『論語』では、この3行が柱であり、根幹をなすものである。江戸時代にこれを「小論語」と読んだのは正しく、この3行を覚えたら論語500章を読んだに等しいといっても過言ではないくらいである。

ただこの3行を心に留めておくだけではなくて、実践していかなければならない。実践するとき大切なのが「仁」であり、どんなに良くできる人でも「仁」のない人は駄目だと孔子は言い切っている。それをよく表しているのが「巧言令色、鮮し仁」という章句である。「巧言」はお世辞のこと、「令色」は人に気に入られるような作り笑顔のことで、すなわち誠実さがいない状態のこと、「鮮し仁」は、そういう人に関して誠実ではないということを行っている。これとセットになっている有名な「剛毅木訥、仁に近し」という章句がある。「剛毅」は物事をやる抜く精神力や決断力、「木訥」は口下手ということである。多少恥ずかしがり屋で口下手でも、やり抜く精神力を持っている人は誠実だと言っている。言葉よりもハートが大切だということを説いているのである。

「辞は達するのみ」は、私の好きな章句である。「辞」は言葉のことで、言葉は人に伝えるためにあるという短い一文である。自分の考えや思いを他人に伝えたいとき、あるいは部下に指示を出すとき、上司に報告するとき、それを的確に伝えられるだけの言葉を持っているかどうか。言葉は毎日身の回りにあふれているが、非常に重要なものであり、だからこそ優れた言葉を身につけなければならないということを行っている奥の深い一行である。

「歳寒くして、然る後に松柏の彫むに後るを知る」という章句はどうしても入れたかった章句である。私は塩竈でもクラスを持っているが、震災の影響で4月に予定していた授業を取りやめにしたため、昨年10月末に一年ぶりに再会したが、子供の顔つきが変わっていた。大人にならざるを得なかっただろうと

いう心情を考えると涙が出てくる。塩竈は剣道連盟のクラスで、剣道の稽古の後に道場で正座して『論語』を読んでいる。そのクラスの震災を体験した子供から手紙をもらった。「仁」というものは見えないが、震災後は町内会でみんなが食べるものを持ち寄り、分けあって食べた。そこに「仁」が見えた。震災で何もなくなり心細くなったが、「仁」は大きくなった。復旧や救援に来てくれた自衛隊やボランティアは身内でもない関係のない人を助けてくれ、もっと大きな「仁」を持っている。」と書かれていた。「歳寒くして、然る後に松柏の彫むに後るるを知る」という章句は、「寒い冬になってはじめて葉を落とす木と落とさない木があることに気がつく」ということであり、樹木の姿に人間を重ねて、いざというときにその人の本当の姿や実力が見えるということ孔子は説いている。震災前からこの章句を好む子供が多かったが、震災の時にこの章句が心に浮かんだという子供も多かった。ここに拠り所を持つことの重要性を実感した。

次は「性、相近し。習い、相遠し。」という章句である。「性、相近し」は、人間は生まれつきみんな良い人であるという性善説に基づくものであり、孔子はみんな「仁」を持って生まれてきているとの考え方をとっている。「習い、相遠し。」とは、その後の生活習慣によって人間は変わっていくということである。幼い子は幼いなり「仁」があり、身体の成長とともに「仁」は大きくなっていく。良い習慣を身につけて生活すれば年相応の「仁」を習得できるということ説いている。

「君子は義に喩り、小人は利に喩る。」というのは、大きな決断をしなければならないときや迷いがあるときにどのように決心すればよいかを助けてくれる言葉である。正しいか、正しくないかで道を選ぶべきであり、損得で物事を決めてはいけないという単純明快な章句である。大人になれば、正しいことばかりを選ぶわけではない。経営者になれば、損得を考えて、利益を追求しなければならなくなる。そのときにも「義」と「利」という2つの道があることがわかっていて、今回利益を追求したならば、次の機会には「義」をとるといったバランスを自分でとれるようにならなければならない。本来追求すべき「義」というものを知らないで、「利」だけを追求してはとんでもないことになる。いつも理想の道を行けるわけではないというのが人間であり、それも説いているのが孔子の魅力である。

次は、「仁遠からんや。我仁を欲すれば、斯に仁至る。」という章句である。2500年前の学校がない時代には学びたいと思えば、学ぶことのできる場所まで自らが行かなくてはならないので、学びたいという熱意が違う。それを受け入れる先生も見捨てずに面倒を見る。弟子達は孔子から教えられる学問を頑張ろうとするが、先生は頑張ったことに対して誉めてはくれるが、最後には「仁を忘れては駄目だ」ということを付け加えている。「仁」はどうすれば身につくのかということ孔子は具体的に語らない。「仁」を身につけるための教科書もない。「それではどうしたらよいのか」という弟子の疑問に、孔子は「仁はそんなに遠いところにあるのか。違う。君の中に「仁」はあるのだ。自分が優しい人になりたいと思えば、そこに「仁」が育っている」と説いている。何か行えば「仁」が育つのではなく、自分の中に「仁」は存在しているのだからそれを発揮すべきで、その発揮の仕方はみんな異なるのだというのが孔子の考え方である。

500章ある中でいろいろ迷ったが、「徳は孤ならず、必ず隣有り。」は、私が好きなので、最後に選んで入れた。祖父は、「これをなくしたら人ではなくなる。それは「徳」だ」、「徳」なくしては何も始まらない」と言っている。これは、孔子の言うところの「仁」に置き換えられるものである。例えば、「徳」というものには優しい気持ちも含まれるし、正しいことを行える行動力や決断力といった強さも含まれている。しかし、「徳」というものを貫徹しようとする、「融通が利かない」とか「堅い」と言われて疎ましがられ孤独になりがちである。しかし、孤独を感じるのは一時的なもので、行いを見て理解

してくれる人が必ず現れるということを孔子は説いている。心が折れそうなときに私はこの章句をつぶやいている。

心の拠り所については、私が言うまでもなく、皆さんすでにお持ちであると思う。私は古典と出会えて大変幸せだと思っている。毎日『論語』を素読していれば、毎日の自分の気持ちや心の有り様について自分の声を聞いていて違いがあることがわかったり、同じクラスなのに子供達の心模様が違っているのに気づいたり、生でやることの良さがとてもたくさんある。私は日々それを楽しませてもらっている。しかも、拠り所になるものについて毎日新しい発見があって、それが自分の中に入っていくのが、なんとすばらしいことかと実感している。

今日は8つの章句しか紹介できなかったが、例えば、「君子は和して同ぜず」など有名な章句がたくさんある。今日紹介した章句に限らず、既にご存知のもの、あるいはこれから出会うものの中に一つでも自分の気持ちの中にずっと入ってくるものがあれば、それは一生ものであるので大事にしていだければと思う。 (了)